様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３０８２９

研究課題名（和文）児童の思考力を伸ばす対話指導力をもつ教師育成を目指した授業デザインの開発

研究課題名（英文）Develpmental study of lesson design for fostering teacher's instruction skill for children's dailogue

研究代表者
假屋園　昭彦（Kariyazono, Akihiko）

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号：３０２７４６７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は小学校道徳の時間における対話活動を取り上げ，対話を通して児童の思考力の育成を行うための，教師の対話指導方法の開発を行った。その成果として，以下の諸点を挙げることができる。第一に，思考力を育成するための対話課題を同定することができた。この対話課題に基づいて，対話の洗練性を評価できる規準を作成した。第二に，児童同士の対話を深化させる機能をもつ教師発問を同定することができた。第三に，これまで実践例がなかった小学校低学年での対話型授業デザインを開発した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop the teacher's instruction skill of children's dialogue for fostering thinking ability. The result was to develop dialogue subject and teacher`s question that can foster children's thinking ability.

研究分野：教育心理学

キーワード：児童　対話　思考力　道徳　授業デザイン　発問　対話の指導方法　対話の展開予測

１．研究開始当初の背景

平成 20 年 3 月告示の学習指導要領の中で言語活動，表現活動が重点項目とされて以来，小学校の授業には，対話活動が積極的に導入されるようになった。こうした現状の中で浮上してきた下記の問題点の克服を目指して本研究は開始された。

第一に，対話をとおして児童にどのような力量を育てようとしているのか，という対話活動の目的が不十分である。現況では，対話活動の目的の多くが「多様な価値観にふれる」，「表現し，伝え合う」といった皮相な水準に留まっている。しかし対話活動の目的はさらに深い水準にある。対話活動の目的は，対話のやりとりそのものの中に存在する論理を児童が習得することによって，児童が新しい論理を習得し，自らの論理の構築力を高めるという思考力の育成にある。

第二に，対話に対する教師の指導方法が確立されていない。現況では，児童の対話活動の間，教師は傍観していることが多い。また対話指導があっても，その多くは意見の後に理由をつけるといった口上のパターンを教える水準に留まっている。このような状態では，対話をとおした論理の構築力の向上は望めない。

ここで対話の目的を思考力の向上と考えると，指導方法についての新たな展望が開ける。本研究では，対話による思考力向上モデルを次のように仮定する。児童は教師との対話をとおして問いの立て方としての論理を習得する。するとそれまで教師が立てていた問いを，今度は児童が独力で立てることが可能になる。そのうえで新たに習得した論理（問いの立て方）を児童は以後の自分達同士の対話で生かせるようになる。こうして児童の対話の質は向上する。この論理習得過程は児童同士の対話にもあてはまる。これらの体験が児童の論理的思考力向上につながる。こうした仮設に立ち，平成 21 年から平成 23 年までの研究では，教師が児童同士の対話に積極的に参加し，問いを発し，児童とのやりとりをとおして児童同士の対話の質を高めるという指導方法を提案し，この方法を対話への指導的参加と命名した。この実践の中で，児童は教師との対話をとおして最初は教師に立ててもらっていた問いを自分達で立てることができるようになった。さらに教師との対話をもとに，児童は教師が立てた問い以上の高い論理を含む問いを自分達で生成できるようになった。これらの実践から対話への指導的参加は，対話型授業の新たな指導方法として有効であることが示された。

２．研究の目的

本研究は，過去三年間に開発した指導方法を洗練させ，指導内容の具体化を図ることを目的とした授業デザイン開発を目的とする。以下に目的を記す。

第一に指導的参加時における教師発問の有効性の検証を行う。これまでの研究のなかで，指導的参加時の教師発問の種類は 26 種類に分類することができた。これらの発問は，対話を深化させる機能という点で，すべて同じ水準であるとは考えられない。対話を深化させ，児童の論理の構築力を向上させる機能をもつ中心的な発問の存在が予想される。そこで児童の論理の構築力を向上させるために有効な，指導的参加における中心発問を特定することを第一の目的とした。

第二に，これまで開発した指導的参加という指導方法の対象は，小学校高学年であった。そこで本研究では，低学年を対象に，対話型授業の可能性と指導的参加という指導方法の有効性を検証する。さらに，高学年と低学年とでは，指導的参加時における中心発問が異なることが予想される。この点の検証も同時に目的とする。

第三に，授業デザイン開発のための検証授業は道徳の授業で実施する。道徳は，これまでも対話活動が導入される頻度が高い授業であった。さらに道徳の授業は，普遍概念としての道徳的価値概念（友情とは何か，誠実とは何か）を扱う点に特徴がある。したがって道徳の授業では，この普遍概念の意味に迫る必要がある。しかし，研究代表者の道徳教育研究の経験によれば，現在の道徳の授業の多くは，普遍概念としての道徳的価値の意味を考えるスタイではなく，読み物資料に登場する人物の心情読み取りに終始している。このため道徳の授業に不全感をもつ教師は多い。こうした道徳の授業の現状の中で，本研究は，対話をとおして道徳的普遍概念の意味に迫るという新しい道徳の授業デザイン開発につながる。

同時に，対話をとおして概念の本質に迫るという授業デザインは，すべての教科に通じる。この意味でも，対話型授業デザイン開発を道徳の授業をとおして実施することは有意義であろう。

３．研究の方法

本研究の特徴は，大学と学校現場との往還にある。すなわち，研究代表者によって開発された授業デザインを，実際に小学校で検証授業として行ってもらう。この検証授業で得られた結果をさらに分析して，授業デザインと教師行動の改良を行う。

また授業デザイン開発および検証授業の実施と分析は，本研究協力者である小学校教師とともに行う。これらの小学校教師は，対話指導の経験が豊富であり，県内でも指導者的存在であるため，研究協力者として妥当であると判断した。

このように本研究は，学校現場での実際の検証授業をとおして授業デザインを開発する。したがって教師の声を反映した内容になり，開発された授業デザインは，実際の授業として活用しやすくなる。

４．研究成果

研究成果は，論文だけではなく，研究代表者が担当する教員免許状更新講習や校内職員研修，講演会などで積極的に紹介し，研究成果を実際に学校現場で，活用してもらえるような活動を行った。

研究面での具体的な成果を以下に記す。

第一に，児童の対話活動への指導方法としての教師の指導的参加時の中心発問の特定について述べる。高学年での検証授業の結果，指導的参加時の中心発問が存在することが確かめられた。中心発問は，「課題について考える視点の提供」発問および「内容への問いかけ」発問であった。前者は，複数の視点を促す発問である。後者は児童の意見の内容を詳しく尋ねる発問である。これらの発問には，児童の対話を深化させる機能があった。

ここで対話の深化という現象を定義しておきたい。学校現場では，対話の深化という表現が頻繁に使われる。しかし，対話の深化が，どのような現象を示すのかについての明確な定義がなされていない。そこで本研究では，対話の深化を，対話の中で新しい命題と単語が生まれることであると定義した。新しい命題とは，新たな論理や考え方を指す。これまでの対話の中では使われなかった単語や論理が現れることを対話の深化として定義した。そして上記の二つの発問は，対話を深化させる機能がみられた。

教師の指導的参加時における中心発問の特定は，低学年でも行われた。低学年での中心発問は，高学年とは異なり，「児童の意見への反証」発問および「児童の言葉の受けとめ」発問であった。「児童の意見への反証」とは，教師が，児童が出した事例と反対の事例を示すことによって，児童の意見の妥当性を問う発問である。自分の意見の反例を出されることによって，児童は自分の意見を別の視点から捉え直す活動を行うことになる。また，「児童の言葉の受けとめ」とは，教師が児童の言葉を反芻することである。自らが発した言葉を，他者の言葉として聞くことになる。するとこの他者の言葉が，思考を次に進めるための土台になる。

このように，児童の対話を深化させるために有効な発問が同定されたことは本研究における成果であると言えよう。

第二に，対話の質を評価する規準の開発を行った。これまで対話を質の面から評価する規準は存在しなかった。その主要な理由は，対話の展開が自在になされるため，規準としてどこをみたらよいのかがわからなかったためである。本研究はこうした対話評価の困難性を克服するための試みであった。本研究では，対話の評価を，対話が本来展開されるべき道筋からどれだけ逸脱しているかによって行った。従来は，対話は自在に展開されるので，対話展開の予測は困難であるというイメージがあった。しかし本研究では，こうした対話展開の自在性のイメージに対し，対話展開の予測を可能にするための方法を開発した。この方法が対話課題への注目である。対話展開は対話課題から必然的に定まるのである。なぜなら対話展開は，対話課題の解決過程であると言えるからである。特定の課題に対して行われる対話は，雑談ではなく，思考過程なのである。

研究代表者は，対話課題が抽象的な命題であれば，対話展開は具象命題と抽象命題のサイクルで展開することを見出していた。そこで，対話を具象命題と抽象命題のサイクルで展開される課題解決過程と捉えることで，特定の対話課題の解決過程は特定されることを見出した。この方法で特定化された課題解決過程としての対話展開の予測から実際の対話展開がどれだけ逸脱しているかを評価規準とした。

第三に，低学年の児童を対象に対話型授業の可能性を検証した。小学１年生に対話課題を与え，教師が指導的参加を行うという授業デザインであった。その結果，小学１年生であっても対話活動は可能であった。また教師とともに，具象命題と抽象命題のサイクル活動によって，道徳上の概念の意味を考えることが可能であることが示された。

ここまでの研究から，対話活動においては対話課題が重要な意味をもっていることが明らかになった。そのため，対話をとおして論理の構築力を向上させるための対話課題の開発という方向に研究を進めた。

対話を授業に導入する意義は，課題が一人での個人思考では展開しにくい内容になっているところにある。個人思考では展開しにくい内容とは，課題が抽象的な命題になっている場合である。したがって，対話課題が抽象的な命題になっていて，一人では思考が展開しにくいところに，複数の人間が集まって対話を行う必然性が生まれるのである。

そこで，課題が抽象的な命題になっている必要があるとしても，どのようなタイプの抽象命題が対話課題になりうるのか，というテーマに取り組んだ。

こうした問題意識のもとで，第四に，道徳での対話型授業で活用することを目的とした対話課題開発を行った。道徳の授業は，先述のとおり，普遍的な抽象概念がテーマになっていることが多い。そこでこうした道徳的普遍概念の意味に迫るための対話課題の作成方法を開発した。

道徳的普遍概念は，善と悪，清と濁，強と弱。理想と現実，無限と有限，などのように対になっている概念が多い。こうした対概念は，一見，対立する意味をもっているように見える。しかし，これらの対概念を吟味すると，対になっている概念同士は，対立しているのではなく，一体的な関係になっていることが明らかになった。たとえば理想と現実という対概念を例にとってみよう。これら二つの概念は，全く反対の意味ではない。すなわち，理想とは現実を知るところから生まれる

のであると考えることができる。このように，一見，対になっている概念の一体的関係を明らかにする，という方法で対話の課題を作成することができることを理論的に見出した。そのうえで，実際に検証授業を行い，これらのタイプの対話課題が活用可能であることを実証した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10 件）

（１）假屋園昭彦・田村敏郎　児童の問いかける力の育成を目指した道徳の時間における教師発問の開発－功利主義と義務論にもとづく自問自答型発問の開発を目指した授業実践－，鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編），査読無，第 66 巻，2015，61－83.

（２）假屋園昭彦　児童の問いかける力の育成を目指した道徳の時間における教師発問の開発－児童が自問自答できる問いかけの開発－鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，査読無，第 24 巻，2015，147－156.

（３）假屋園昭彦・小峯三朗・京田憲子・西國原拓也　教師と児童とが対話をとおして道徳的価値を発見する授業デザインの開発（Ⅳ）－抽象命題と具象命題の往還型対話をとおして生命尊重に関する道徳的価値の発見を目指した小学校高学年向け授業－，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，査読無，第 24 巻，2015，169－187.

（４）假屋園昭彦・馬場智也・小峯三朗・京田憲子　教師と児童とが対話をとおして道徳的価値を発見する授業デザインの開発（Ⅲ）－小学校低学年の道徳の時間における生命尊重を扱った対概念の対比型授業デザインの開発－　鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，査読無，第 24 巻，2015，157－168.

（５）假屋園昭彦・馬場智也・小峯三朗・京田憲子　教師と児童とが対話をとおして道徳的価値を発見する授業デザインの開発（Ⅱ）－抽象命題と具象命題との往還型対話による授業デザインの開発　鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編），査読無，第 65 巻，2014，87－123.

（６）假屋園昭彦　道徳の時間における対概念の対比型授業デザインの開発（Ⅱ）－生命尊重をとおして生きる原理を考えるための道徳の時間を目指して－，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，査読無，第 23 巻，2014，131－141.

（７）假屋園昭彦　道徳の時間における対概念の対比型授業デザインの開発（Ⅰ）－対概念の対比をとおした道徳的価値の本質へのアプローチ－　鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，査読無，第 23 巻，2014，121－129.

（８）假屋園昭彦・馬場智也・小峯三朗・京田憲子　教師と児童とが対話をとおして道徳的価値を発見する授業デザインの開発（Ⅰ）－小学校低学年における対話活動の可能性を探る－，鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編），査読無，第 64 巻，2013 ,107－135.

（９）假屋園昭彦・永里智広　児童の対話学習における教師の発問方法と評価規準の開発（Ⅱ）－対話展開の予測にもとづく教師の中心発問と評価規準の開発－，鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編），査読無，第 64 巻，2013，85－112.

（１０）假屋園昭彦・永里智広・坂上弥里　児童の対話学習における教師の発問方法と評価規準の開発（Ⅰ）－対話展開の予測にもと八谷直樹・假屋園昭彦づく教師の中心発問と対話への評価規準の開発－，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，査読無，第 22 巻，2012，101－115.

〔学会発表〕（計 3 件）

（１）八谷直樹・假屋園昭彦　教師による児童の対話活動に対する指導方法の開発－小学校低学年に対する教師の指導的参加法の効果の検証　日本教育心理学会第 54 回総会，2012 年 11 月 25 日　琉球大学千原キャンパス（沖縄県中頭郡）

（２）八谷直樹・假屋園昭彦　小学生の話し合い活動における児童と教師の相互作用分析－低学年に対する教師の指導的参加法の効果の検証－　九州心理学会第 73 回大会，2012 年 11 月 11 日　鹿児島大学教育学部(鹿児島県鹿児島市)

（３）八谷直樹・假屋園昭彦　教師と児童とが対話を通して道徳的価値を発見する授業デザインの開発　日本教育心理学会第 55 回総会，2013 年 8 月 17 日　法政大学市ヶ谷キャンパス（東京都千代田区）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

假屋園昭彦（KARIYAZONO,Akihiko）

鹿児島大学教育学部教授

研究者番号：30274674

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし